



講演会がありました！



日本から実践女子大学の渡辺敏先生をお招きして、「海外に住む子どもたちへの家庭教育」と題して保護者の皆様に対して講演をしていただきました。日本で長い間、小学生を教えたご経験から、「海外から戻ってきた子どもの

戸惑い」や「海外に住む子どもたちの心の拠り所」など補習校に通う子どもたちが直面する問題を保護者の立場からどのように考えるかを示唆していただきました。特に国語（日本語）力持続増進の観点から「(スマート) **フォンより本**」は大変印象に残る言葉でした。会の最後に保護者の皆様から幾つか質問が出されました。従来は「補習校では子どもを追い詰めて国語をやらさなければ駄目だ」と言われてきたのに、「子どもの主体性を尊重する」は相反することではないかとの指摘がありました。正直言って、この質問には一瞬驚かされました。学校でも家庭でも「子どもを追い詰める」状況の中からは何も生まれないと思っているからです。英語が土壌の環境の中での日本語の教育は、決して生やさしい事ではなく、大きな決心と努力を伴うことです。もちろん、子どもたちへの叱咤激励と家庭の協力は大変重要な事です。それが子どもを追い詰める事により「嫌い」になり「や～めた！」になってしまっは意味がなさないと思います。前号の補習校便りでも紹介した通り、文部科学省が掲げる「グローバル人材育成事業」では、在外教育施設に通う子どもたちを「金の卵」と表現しています。正しく、カンタベリー補習校に通う子どもたちは「金の卵」なのです。その金の卵が、卵のままで終わるのか、金色に輝く鳥となり「巣立ち」を迎えるかは「保護者の皆様の捉え方」によって変わってくると思います。小学部低学年の子どもたちにはある種の「おだて」も必要でしょうし、高学年になれば、補習校に通う意義を話すことも大事になってくる

と思います。いずれにしても子どもに対しては国語（日本語）教育の継続が一番重要なことだと思います。そのためには子どもと同様に保護者の皆様の協力と覚悟が必要だと考えます。保護者の皆様も「金の卵」を育てる「金の親鳥」なのです。補習校と一緒に子どもの巣立ちを応援したいと考えています。よろしくお願いいたします。



4校時終了時に、不審者対策の避難訓練を行いました。不審者が校内に入って来た時の対応の訓練でした。実際には、そのような事がないのが良いことなのですが、万が一の場合を想定して訓練をしておくことが必要です。今回は特に在クライストチャーチ領事事務所の村瀬所長をお迎えして、ご講評を頂きました。補習校は、常に外務省の領事館や、いろいろな方々に守られて成り立っていることを再確認致しました。

9日夜に「巧」10周年コンサートが行われました。本校初代校長の豆野先生が作られたと伺っております。補習校の卒業生をはじめ在校生や教員の顔も多く見られ、大変素晴らしいパフォーマンスに驚かされました。何より、彼らの熱意と必死さに心を打たれました。日本古来の伝統の芸をニュージーランドにしながら、ここまで高



めるには、中心になって指導する指導者の存在や会を運営する方々の涙ぐましい努力の賜と思います。子どもたちの生き生きとした表情を見ることが出来て、目頭が熱くなりました。



10日に中学部3年生と保護者がタワージャンクションで天気が悪いなか「ソーセージズル」を行いました。精力的に働く生徒達を見て、中3卒業キャンプに馳せる思いを強く感じました。ご苦労様でした。また、わざわざ買いに来て下さった方々、御協力大変ありがとうございました。